

目 次

はじめに

■第1部 ルーカスの個人史とスター・ウォーズ■

第1章 「自己」

第1節 精神分析的アプローチとは

第2節 ルークはルーカス

第2章 「父」

第1節 ヴェイダーのイメージの源流は？

第2節 ルーカスの父親はどんな人物だったか？

第3節 父親との決別

第4節 「父親」イメージとしてのヴェイダー

第5節 ヴェイダーとルーカスの父は無関係？

第3章 「母」

第1節 スター・ウォーズの料理はまずい？

第2節 スター・ウォーズのゲテモノ食い

第3節 母性の不在

第4節 母性の登場

第5節 ルーカスの否認

第4章 ルーカスの少年時代

第1節 「嫌な予感がする」本当の理由

第2節 ルーカスはいじめられっ子

第3節 作品中のイジメ描写

第5章 ハイスクール時代 車とメンテナンスの日々

第1節 映画の中のメンテナンスシーン

第2節 機械いじりが好きなアナキン

第3節 メンテナンスに熱中

第6章 ルーカスの復活

第1節 繰り返される復活と再生のテーマ

第2節 逆転劇としての復活と再生

第3節 ルーカスの復活

第4節 『アメリカン・グラフィティ』の事故シーン

第7章 大学への進学 故郷から出たいという思い

第1節 辺境惑星から出たかったルーク

第2節 田舎から出る映画『アメリカン・グラフィティ』

第3節 支配からの脱出『THX1138』

第4節 スター・ウォーズ・マインドの継承『遠い空の向こうに』

第8章 「選択」「決断」「運命」

■第2部 ルーカスの思想史としてのスター・ウォーズ■

第1章 ジョゼフ・キャンベルの神話学

第1節 キャンベルの影響

第2節 「千の仮面を持つ英雄」の影響

第3節 輪は完成する

第4節 『神話のイメージ』の影響

第5節 オビワンの霊体化について

第6節 原質神話との相違

第7節 「召命の歓迎」時代の変質と原質神話の変質

第2章 ユング心理学と元型論

第1節 ルーカスとユングの接点

第2節 元型論的スター・ウォーズ解釈

第3節 「トリックスター」としてのジャー・ジャー・ビンクス

第3章 カスタネダの文化人類学とナワール

第1節 カルロス・カスタネダの影響

第2節 「力の獲得」と「力の約束」

第3節 「恐怖」「明晰さ」「力」「老い」

第4節 霊体としてのオビ=ワン

第4章 フォースとは何か？ 思想史的背景からの考察

第1節 スター・ウォーズは宗教映画？

第2節 フォースは神か？

第3節 「源泉なる力」としてのフォース

第5章 その他の思想的影響

第1節 キルケゴールの「信仰への飛躍」

第2節 東洋思想

第6章 黒澤明

第1節 黒澤との出会いと別れ

第2節 『隠し砦の三悪人』

第3節 『七人の侍』

第4節 『野良犬』

第5節 黒澤映画の師弟関係

第6節 「和」のテーマ すなわち和風

第7章 神話の創造

第1節 「私は現代の神話を作りたかった」

第2節 引用の集大成

第3節 神話の作り方 ～徹底したリサーチ

第4節 集合的無意識につながる共感

■第3部 スター・ウォーズ、その本質への冒険■

第1章 「父親探し」としてのスター・ウォーズ

第1節 神話における「父親探し」の重要性

第2節 スター・ウォーズと「父親殺し」

第3節 スカイウォーカー的調和 エディプス・コンプレックスを超えて

第2章 アナキンがダークサイドに落ちる心理学的理由

第1節 クワイ=ガンが父親役となれば…

第2節 あるトラック好きな少年の一例

第3節 友人としてのオビ=ワン

第4節 「誉めること」と「叱ること」

第5節 父性の補完作業

第3章 右腕斬りと去勢

第1節 セイバーは男根の象徴？

第2節 ルークの万能感

第3節 アナキンの万能感

第4節 アナキンの去勢

第5節 デューク=伯爵は、アナキンの父か？

第6節 母性愛への避難

第7節 ダークサイド落ちと去勢

結語 父性と母性のバランス

はじめに

1977年『スター・ウォーズ エピソード4 新たなる希望』が公開された。日本公開は、翌78年。それから、27年がたった。

2005年『スター・ウォーズ エピソード3 シスの復讐』の公開である。

スター・ウォーズ六部作は、ここに完成する。

早いものだ。27年間がたつのは。

アメリカに来てよくわかったが、アメリカにおけるスター・ウォーズの人気というものは、すさまじいものがある。アメリカでスター・ウォーズを見ていない人を探すのは大変である。何回も見ているのが、当たりまえである。アメリカのスター・ウォーズ・ファンといえば、映画の主要なセリフをほとんど暗誦できる。私のスター・ウォーズへの情熱など、足元にも及ばないと、自信がなくなってくる。

スター・ウォーズは、なぜこれほど多くの人を魅了するのか。

なぜ。世界中で大ヒットしているのか。

なぜ、みんなスター・ウォーズを何十回も繰り返し見るのだろうか。

ただ、「おもしろい映画だから」というだけでは、説明できない「何か」が、そこにある。

考えてみれば、我々が子供の頃、同じ絵本を毎晩、何度も何度も読んでもらった記憶がある。同じ物語なのに、決してあきることがない。むしろ、繰り返すほどに心に響く。

「スター・ウォーズ」も、これと似ている。普遍的な、心に響くストーリーが、スター・ウォーズにはある。言いかえれば、「スター・ウォーズは神話である」ということだ。絵本で描かれた「昔話」も同じである。

スター・ウォーズの解説書の類も山ほど出ている。しかし、「スター・ウォーズ」とは何か？ スター・ウォーズは、なぜこれほど人々を魅了するのかについて、明解な答を書いた本は、未だない。私は精神科医であるが、本書ではスター・ウォーズの魅力。それを心理学という視点から、徹底解明を試みる。

いままで疑問や謎と思われていたことが、心理学的には必然であったこともわかるだろう。そして、スター・ウォーズが人々を魅了する、本当の理由に迫りたいと思う。

■■第1部 ルーカスの個人史とスター・ウォーズ■■

第1章 「自己」

第1節 精神分析的アプローチとは

小説や映画、あるいは絵画や音楽などの創作作品を、精神分析的な視点から解読する試みはよくある。その場合、その作家の創作物である作品に、作家の個人的な関係性。すなわち、父親や母親との関係。友人や恋人。幼少期や青年期の経験。その「作家」の人生や生き方などが、どのように「作品」に反映されているか。精神分析的には、そうした個人史に基づいた作品の解読というものが、とても大切になってくる。監督、脚本、製作総指揮としたスター・ウォーズを作り上げたジョージ・ルーカス。まずは、この創作物「スター・ウォーズ」が、ルーカスの人生とどのように関係しているのか。その点について考えてみよう。

当然ながら、ジョージ・ルーカスと私は面識があるわけではない。インタビューのジョージ・ルーカス自身の言葉。彼の伝記。そして、彼が作り上げた映画作品。それらを基にし、引用しながら考察をすすめていく。

これは、スター・ウォーズに対してアプローチするための一つの方法である。

もし、ルーカスに本書を見せたとするなら、「勝手な解釈」と一笑に付されるかもしれない。しかし映画の解読に、「100%正しい解釈」は存在するはずもなく、一人の人間を「100%正しく」理解することも不可能であり、一人の人間が自分自身を客観的に正しく理解することもまた困難である。

しかしながら、小説や絵画などの芸術作品に、その作家性。その作家の人生が色濃く反映されることは、精神医学的には常識である。映画に関しても、またしかりであろう。映画作品そのものの解読を通して、その作家にアプローチする。その映画作品のテーマや核心部分により近づこうという試みは、精神医学、心理学的には正攻法と考えられよう。

第2節 ルークはルーカス

スター・ウォーズは、フィクションである。すなわち、作り話である。この宇宙冒険活劇を、現実の物語と、勘違いする人はいないだろう。しかしながら、「スター・ウォーズは完全なるフィクションか？」といわれれば、「そうである」と明言もできな

い。

スター・ウォーズにはジョージ・ルーカスの実体験。彼の人生や、彼の思い入れが色濃く反映されている。いうなれば、スター・ウォーズは「ルーカスの私映画」としての側面を持つ。映画全体はフィクションであることは否定できないが、その物語の「構成要素」はルーカスの実体験と、深く関わりがある。

スター・ウォーズ全6作の中で、特に、ルーカスの私映画的側面が強いのが、第一作である『エピソード4 新たなる希望』である。その脚本は、ルーカスが全身全霊を込めて書き上げたわけだから、ルーカス自身が反映されないのがむしろおかしい。

『新たなる希望』の主人公はルーク(Luke)・スカイウォーカーである。ジョージ・ルーカス(Lucas)のハイスクール時代のニックネームは「Luke(ルーク)」だった。ルーク・スカイウォーカーは、略すと「Luke S.」。これを読んでみよう。「ルーク・エス」、「ルーカス」になるのである。このようにルーカス自身が、ルーク・スカイウォーカーに自らのイメージを重ねて描いていることは、まず「主人公の名前」によって示される。

ルーカスはインタビューで、「あなたは、ルークやアナキンに自分自身を投影していませんか？」という質問に対して次のよう答えている。

「ああ、そうだね。彼らそれぞれにぼくは、たしかに自分自身を投影しているんだと思う。だけど一般的なこととして、映画を作ると、どうしても自分を投影させてしまうものなんだと思うよ。監督のことを理解したければ、その作品を観ればいい」(CUT日本版、第8号、1999年)

「私の場合、生活の全てがきっかけになる。好きなこと。見て思ったこと。注目してきたこと。それぞれで感じたものを形にしていく。好きなものやデザイン、好きな人物像。思い出の瞬間や感動したこと。そのままの思いで伝えたい」(スター・ウォーズの神話学)

ルーカスが、ルークやアナキンに自らのイメージを重ねていることは、彼自身が認めるところである。「監督のことを理解したければ、その作品を観ればいい」、つまりルーカスのことを理解するために、「スター・ウォーズ」という作品を見て、解読するというアプローチが正しいことを、ルーカス自身が支持している。

「ルーク」や「アナキン」には、ルーカスが反映されている。それは、具体的どのように、どの程度反映されているのか。まずは、ルーカスの個人史とスター・ウォーズのつながりを詳しく考えてみよう。

第2章 「父」

第1節 ヴェイダーのイメージの源流は？

『新たなる希望』の冒頭シーン。レイア姫が乗る宇宙船ブロッケード・ランナーを拉致した帝国軍。そして、宇宙船の壁を突き破って、帝国軍のストーム・トルーパーが突入してくる。それに続いて、黒ずくめ、黒マスクの大男が入ってくる。

圧倒的な存在感。そして、恐怖感。

ダース・ヴェイダー、その人である。

『新たなる希望』のダース・ヴェイダーは、圧倒的な存在感で、我々に迫って来た。映画史に残る最も強烈な悪役と位置付けられる。では、この圧倒的な存在感を持つダース・ヴェイダーのアイデアは、どこから来たのだろうか？

『帝国の逆襲』で決闘の最中、ダース・ヴェイダーはルークに言う。

“I'm your father.” 「私は、お前の父親だ」

ダース・ヴェイダーは、ルーク・スカイウォーカーの父親アナキン・スカイウォーカーであった。

ヴェイダーの綴りは「Vader」。ドイツ語で“der Vader”は「父親」の意味である。『帝国の逆襲』のヴェイダー自身による「私は、お前の父親だ」という告白を待たずとも、ヴェイダーが「父」のイメージを担っていることは予想がつくのだ。

さて精神分析の視点から見ると、ここである仮説を容易に思いつく。

ルーク・スカイウォーカーには、ルーカス自身が反映されている。ルークの父親であるヴェイダー(アナキン・スカイウォーカー)には、ルーカスの父親が反映されているのではないかと。

第2節 ルーカスの父親はどんな人物だったか？

ダース・ヴェイダーは、ルーカスの父親が何らかの形でモデルになっている可能性はないのか？ それを考えるために、ルーカスの父親について知る必要がある。

「ルーカスの父ジョージ・ウォルトン・ルーカスは、貧しいカリフォルニアの油田労働者の息子として生まれ、さらに迎えばアーカンソー州の貧農の一族、大恐慌

の頃にカリフォルニアへ流れてきてそのまま住みついた一家である」

「彼は若い頃から<L・M・モリス>文房具・事務用品店に勤め、息子ジョージが生まれる頃に店の権利を買い取り、玩具からタイプライターまでを扱う大きな店に成長させていた」(ルーカス帝国の興亡、P24-25)

ルーカスの父は身長二メートル。開拓者のような屈強な体型は、ヴェイダーと重なる。二メートル以上もある大柄な父親は、痩せでチビのルーカス少年には、どう見えただろうか？

文房具店の経営者である父は、「欲しい物は自分で働いて手に入れろ」という教えを厳しく子供たちに教えた。例えば、わずか四歳になった子供たちに手伝いと引き換えに小遣いを与え、金を稼ぐことの大切さを教えた。あるいは、写真に興味を示したルーカスが最初買ったカメラが、自分で稼いだお金で買ったのではなく、母親に買ってもらったという事実を父が知った時、とても嫌な顔して「カメラでもなんでも、欲しければ自分で手に入れるべきなのだ」と言った。これは、子供たちの将来を思っただけの父親なりの金銭教育であったが、小さな子供たちにとってはとても厳しいものであった。規律、自制心、独立独行が優れた人格の核であるという信念のもと、父親は子供たちを厳しく教育した。

ルーカスは言う。「親父は一家のボスだった。おっかない人だったね」

またルーカスの父は、ルーカスだけではなく、ルーカスの友人たちにも恐れられていた。ルーカスの幼馴染のジョン・プラマーは、ルーカスの父親を死ぬほど恐れ、彼を避けるためにあらゆる努力を払った。「ミスター・ルーカスが入ってくる度に、ぼくは隠れてたね」と、プラマーは言う。

ルーカスの幼馴染であり、またハイスクール時代にルーカスの父の文房具店でアルバイトをしたことがあるジョージ・フランケンシュタインは言う。「タフな人だったね。十五分遅刻したり、伝票にミスでもあったりしたら、こってり絞られたもんさ。あの人はみんなにカツを入れるためにL・M・モリス商会で毎日わめきちらしていたんだ」(スカイウォーキング、P65)

ルーカスの父親は非常に厳しく、怖い人だったようだ。

第3節 父親との決別

ルーカスの父親はモデストで一番大きな文房具店を経営していた。ルーカスは四人兄弟の三番目であったが、兄弟で唯一の男の子であり、父親はルーカスに自分の店を継いで欲しいと強く願っていた。

一方、ルーカスは退屈な街モデストから抜け出たいとずっと思っていた。また、退屈な家業だけは継ぎたくないと思っていた。写真への興味が高まるルーカスは、州立サンフランシスコ大学への進学を考え、それを父親に告げる。(注)

父親は強く反対した。「おまえはせいぜいディズニーランドの切符係にしかなれないだろう。まともな仕事に就けるわけがない。二、三年で尻尾を巻いて帰ってくるに決まっている」

ルーカスもまた叫んだ。「もう二度と戻ってくるもんか！ 絶対、三〇歳になる前に大金をつかんでやる」そう言って、ルーカスは家を飛び出した。

このエピソードは、そのまま『新たなる希望』の中で再現される。重要な場面なのでセリフを採録してみよう。

ルーク 「今年の収穫も手伝うと言ったけど、今年アカデミーに入りたいんだ」

オーエン 「収穫の前にか？」

ルーク 「ドロイドがいる」(注)

オーエン 「収穫は大忙しだ。一年辛抱しろ。今年の収穫の金で来年は人を雇うから。お前が必要だ」

ルーク 「丸一年もある」

オーエン 「一シーズンだ」

ルーク 「去年もそう言ったよ」と、食卓を離れる。

水分農場の収穫を手伝ってくれというオーエン叔父が、文房具店のあとを継いで欲しいというルーカスの父にピッタリと重なってくる。ルーカスの体験をもとに、オーエンとルークのリアルなやりとりが描かれる。

注) 最初、ルーカスは州立サンフランシスコ大学で写真を学ぼうと考え、願書も出して入学も許可されていたが、結局はロサンゼルス(USC(南カリフォルニア大学))の映画学科に入学する。

注) スター・ウォーズの世界では、ロボットは「ドロイド」と呼ばれる。語源は、「アンドロイド」の「アン」をとったものだろう。スター・ウォーズのドロイドは、非常に人

間的である。

第4節 「父親」イメージとしてのヴェイダー

『帝国の逆襲』『ジェダイの帰還』ではルークと父ダース・ヴェイダーとの戦い、葛藤が物語の中心となる。ルークとヴェイダーの葛藤は、まさにルーカスと父親の葛藤そのものである。圧倒的な存在感と力強さ。威圧感。ヴェイダーはルークの父であると同時に、ジョージ・ルーカスにとっても父(のイメージ)であった。

ルーカスはヴェイダーに関して、次のように述べている。

「ヴェイダーは力強さを備えた究極的な父である」

これは「力強さ」によって象徴される「父性」のイメージがヴェイダーに与えられていることを意味する。理想的な、あるいは期待される父親の力強さという一般的なイメージが、ヴェイダーには賦与されている。ルーカス自身の父親のイメージから出発したヴェイダーのイメージは、普遍的な「力強い父」というイメージにまで昇華されていた。

『帝国の逆襲』での、ルークとヴェイダーの対決シーン。その力の差は歴然としており、ルークはヴェイダーに右腕を切られる。その直後、ヴェイダーはルークに言う。

“I’ m your father.” 「私はおまえの父親だ」

「ヴェイダーは普遍的な力強い父というイメージ」という観点で、このシーンを見直せば、興味深いことが見えてくる。“I’ m your father.”の第一義的な意味は、「私はおまえ(ルーク)の父親だ」という、ルークに対する事実の告白、あるいは暴露である。

そして、さらにこのセリフをもっと広い意味として解釈することができる。すなわち、「私はおまえたち(観客)の父親だ」、「私はおまえたち(観客)の父親の象徴的イメージだ」という理解である。

第5節 ヴェイダーとルーカスの父は無関係？

「スター・ウォーズにおける善と悪、あるいは父と子というテーマは、あなたの個人的なモチーフに思えますが？」という質問に対してルーカスは次のように答えている。

「私は決してそうは思わない。なぜなら、私の父は悪人ではなく、ヴェイダーと比較できないほど偉大な人だ。スター・ウォーズにおける善と悪、あるいは父と子というテーマは、象徴的な父と息子を使ったにすぎない」(CUT日本版、第 8 号、1999 年)

ルーカスはスター・ウォーズにおける親子の描写を、普遍的な父と子のイメージであって、自分の個人史と関係がないという答である。しかしこれは精神医学的にみると、「否認」に思えてしょうがない。「否認」とは、防衛機制の一つで、本質的なことをズバリ指摘された場合、人は自己防衛的にその事実を拒否してしまう、受け入れないという心性である。

例えば、「あなたは、癌です」と、急に癌の告知を受けた患者さんは、「自分が癌であるはずがない」と思い、こんな病院は信頼できないので別な病院で再検査を受けようと思ったりする。これも、「否認」である。

スター・ウォーズでいえば、『帝国の逆襲』で、ルークはヴェイダーから、「私は、お前の父だ」と告白をされる。ルークは「ノーーーー」と絶叫する。これが、「否認」である。単に驚いたわけではない。ヴェイダーが事実無根の嘘を言っていると思ったのなら、あれほど動揺することはないだろう。ヴェイダーが言うことは事実であると思いながら、その事実をすぐには受け入れ難い、受け入れたくないという思いがあるので、否定してしまうのである。このように、人間はズバリ本当のことを指摘されると、否定してしまう心性がある。ルーカスがヴェイダーと父親の関係性を、つい否定してしまったのも「否認」ではないだろうか。

ルーカスは、別なインタビューでは次のように述べている。

「座って考えるだけじゃダメなんだ。私の場合生活の全てがきっかけになる。好きなこと、見て思ったこと、注目してきたこと、それぞれ感じたものを形にしていく。好きなものや、好きな人物像。思い出の瞬間や感動したこと。そのままの思いで伝えたい。」(スター・ウォーズの神話学)

ルーカスは自分が体験した全てが、映画に反映されていると述べている。また、自分の好きな人物像も、映画に反映されると言う。

ルーカスは人生の師として、三人の人物をあげている。最初の一人が、父ジョージ・ルーカス・シニア。二人目は映画監督フランシス・コッポラ。三人目が神話学者のジョゼフ・キャンベルである。ルーカスの人生の師、すなわち人生に大きな影響を与えた人物であり、尊敬する人物として自分の父の名を挙げている。自分の

経験や自分の好きな人物が、映画に影響を与える。にもかかわらず、人生の師といえる自分の父が、映画の「父親像」に影響を与えないということがありえるのか？

あるいは、ヴェイダーが「父」という普遍的なイメージを象徴するとしたら、それはルーカスにとっての父のイメージもそこに内包されなければ普遍的とはいえない。ルーカスの父親との個人的な関係を映画内に持ち込んでいないという発言は「否認」である。上記のように、モデストを離れてサンフランシスコへ行くときの父親とのやりとりが、『新たなる希望』のルークとオーエン叔父との関係に再現されていた。明らかにルーカスの父とのエピソードが、映画内に持ち込まれている。

父親をイメージしてヴェイダーというキャラクターを作ったのではない、というルーカスの言葉は本当だろう。自分の父親を意識して脚本を書いたわけではない。しかし、無意識的には、関係しているのではないだろうか。

ヴェイダーのイメージは、ルーカスの無意識的な父親像に端を発し、万人に対する父、普遍的な父親像へと昇華されている。ヴェイダーはルーカスにとっての父でもあり、我々にとっての父のイメージ。そして、神話的な「父」であり、普遍的な「父性」を象徴していると考えられる。

さて、スター・ウォーズにおける「父性」の問題は、スター・ウォーズの核心部分であり、最大のテーマといってもいい。エディプス・コンプレックスや父親殺しの問題と絡めて、さらに詳しく考察する必要があるわけだが、そのためには「母」の問題や、キャンベルの神話学の影響を知らなければ、議論できない。まずは、スター・ウォーズをルーカスの個人史という視点で概観したうえで、本書の後半で「父」の問題をじっくりと議論する。

■■第2部 ルーカスの思想史としてのスター・ウォーズ ■■

ルーカスは言う。

「もともとは大学で文化人類学を勉強していたし、それに根っからの歴史好きなんだ。その二つの要素は、ぼくのすべての映画に反映していると思うね」

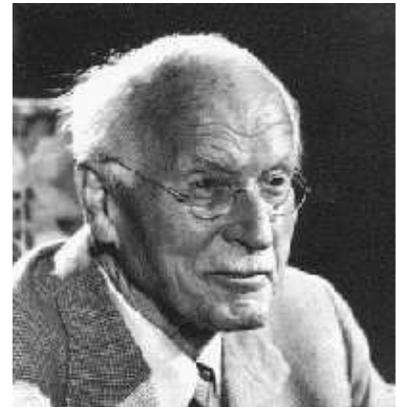
ルーカスはモデスト短大(Modesto Junior College) に在籍中に、文化人類学、神話学を専攻し、その他にも民俗学、哲学、心理学、歴史など幅広い知識を身につけた。それらのルーカスの知識は、彼の言葉通りルーカスの作品に反映されている。すなわち逆に言えば、ルーカスの映画であるスター・ウォーズをより深く理解するためには、これらのルーカスの思想的背景を知る必要があるだろう。ルーカスが影響を受けたと考えられる何人かの人物を取り上げ、その思想がいかにスター・ウォーズに反映されているかを考察する。

第2部からは、第2章「ユング心理学と元型論」の導入部分をお読みください。

第2章 ユング心理学と元型論

第1節 ルーカスとユングの接点

カール・グスタフ・ユング。スイスの精神医学者で、フロイトが創始した精神分析を発展、普及に貢献した。「集合的無意識」「元型」「夢分析」などの提唱者として知られる。前章で紹介したルーカスの師の一人であるジョゼフ・キャンベル。そのキャンベルの思想の源流がユングにある。それは、キャンベル自身が語っている。



「私がドイツで大学院に行っていた頃、フロイトとユングの、神話の分野に心理学的な次元を開いた著作に出会いました。突如として、なぜ自分が神話に興味を持ったのかがわかり、そうするとたくさんの新しい謎や不思議も解明されました」(ジョゼフ・キャンベル対談集、P169)

「千の顔をもつ英雄」にはしばしば、「神話元型(mythic archetype)」という言葉が登場するが、この「archetype」こそがユングが提唱した「元型」のことである。

ルーカスとユングの接点については、『新たなる希望』のプロデューサー、ルーカスの片腕であったゲーリー・カーツが述べている。

「僕は、個人的には集合的無意識の心理学と、人間の原初的な性格をどう捉え、それを我々の生活にどう反映させるかというユングの思想を信じていた。ジョージも同じよう考えを持っていたと思う」(ルーカス帝国の興亡、P70)

キャンベルがユング思想の中で注目したのは、「集合的無意識」と「元型論」である。ルーカスもおそらく、そであろう。これらは、神話が我々に何を伝えようとするのかを考える上で、大きなヒントを与える。当然、スター・ウォーズの理解にも。

以前、シカゴで行なわれた、演劇鑑賞とその演劇に対する討論のセッションに参加した。興味深かったのは、俳優と観客との討論の中で、「archetype (元型)」という言葉が、何度も登場していたことだ。アメリカの俳優や脚本家にとって、ユングの元型論は知っていて当然の常識と言う感じで、話が展開していた。映画ファ

ン、そしてスター・ウォーズ・ファンにとって、知っておいて損のない心理学概念といえるだろう。

第2節 元型論的スター・ウォーズ解釈

■元型とは

ユングは、人間の意識の中には個人個人でその現れ方は異なっても、ある共通の構造をもった心の働きが存在することに気付き、それが無意識の奥の方にあるひとつの原子的な構造体の映し出すイメージとして存在しているのではないかと考えた。そのような原子的構造体は誰の心の中にも同じように存在していると考えられ、ユングはこの構造体に「元型(archetype)」という名前を付けた。この元型が存在する部分は人類に共通の層であると考え「集合的無意識」と呼んだ。そして個人の無意識はその上の層に存在すると考えた。

ユングが重視した元型には、「セルフ(自己)」「シャドー(影)」「アニマ」「アニムス」「ペルソナ(仮面)」「グレートマザー(太母)」「老賢者」「トリックスター」などがある。他にも、「ガーディアン(門番)」「ヘラルド(使者)」「シェイプシフター(変化する者)」などがある。

スター・ウォーズにはほとんど全ての元型が含まれている。ルーク・スカイウォーカーは「英雄」である。「使者」である3POとR2との出会いをきっかけとして、自分の父親を探しの旅に出るが、オビ=ワン・ケノービとヨーダという「老賢者」の守護を得る。ハン・ソロは「シェイプシフター」あるいは「ならずもの」であり、最初は金にしか興味がなかったが、最後には友情を選択しルークを助けに現れる。ルークが思いを寄せるレイア姫は、ルークの「アニマ」である。ダース・ヴェイダーは「影なる父」であり、「ペルソナ」でもある。ダークサイドは、ヒーローを苦しめる「影」を象徴する。地上から宇宙へ。デス・スターから宇宙へ飛び立つ時など、越境しようとするときに必ず邪魔するストーム・トルーパーは「門番」である。

以下、重要なキャラクターについて、さらに詳しい元型的な解釈を試みる。

■「老賢者」としてのオビ=ワンとヨーダ

「老賢者(Wise Old Man)」は、知恵の象徴である。また、心の広さも備えており、主人公が困った時に、助言と助力(アイテム)を与える。中国の仙人のような、白

髪に長いひげの老人というのが典型的なパターンである。「老賢者」は、しばしば「太母」と対になる元型で、父親像を有する。

例えば、アーサー王伝説のマーリンが「老賢者」である。アーサー王はマーリンの導きによって、エクスカリバー(アイテム)を入手する。『ロード・オブ・ザ・リング』ではフロドを導く魔法使いガンダルフが「老賢者」である。『ハリー・ポッター』シリーズでは、ダンブルドア校長だ。『千と千尋の神隠し』では、千尋が湯屋で働くための方法を教えてもらう釜爺が「老賢者」である。

『新たなる希望』では、オビ=ワンが「老賢者」である。ルークに父親の形見であるライトセイバー(アイテム)を渡し、フォースについての基礎を教える。ルークの良き助言者であり、精神的な支えでもある。

『帝国の逆襲』ではヨーダが「老賢者」となり、ルークを導く。『ファントム・メナス』ではクワイ=ガンが「老賢者」となりアナキンを導く。

オビ=ワンは「老賢者」であると同時に、「父」でもある。『新たなる希望』では、「good father(良き父)」をオビ=ワンが担い、「shadow father(影なる父)」をダース・ヴェイダーが担う。オビ=ワンは父についての昔のエピソードを語り、ルークの父との再会の手がかりを与える。

ルーカスは言う。「私はヴェイダーを父として描きたかった。ただし、それは父親像として。そして、もう一つの父親としてベンを創り上げた。半分はライト、半分はダーク、あるいは肯定的な部分と否定的な部分」

■ 「老賢者」「グレートマザー」としてのヨーダ

ヨーダもまた「老賢者」である。ジェダイ評議会の長でもあったヨーダ。さらに、八百歳を超える経験と知識は、他のジェダイも全く及ばない。

ヨーダは、「老賢者」であると同時に「グレートマザー」でもある。「グレートマザー(太母)」とは、大地に象徴される母なるイメージであり、肯定的な面では包み込み育むものであるが、否定的に現れると呑み込む存在となる。ヨーダはその包容力でルークを包む、一人前のジェダイへとルークを育てていく。

また、ヨーダには「Child hereo」の側面もある。「童子(Child)」元型は、子供のよう

な無邪気さ、やんちゃさの象徴である。例としては、キリスト教の「幼子イエス」。日本の「桃太郎」「一寸法師」。北欧神話の「小人」や「ホムンクルス」など。「童子」元型は、「Child hereo」のように、しばしば他の元型と一緒に現れる。

ヨーダは「老賢者」としての知恵と寛容さをもちながら、子供のようなイタズラ心とやんちゃな心を兼ね備えている。『帝国の逆襲』では、ルークと初めて会ったヨーダは、自分がルークの探しているジェダイ・マスターであることを隠して、ルークをからかう。ルークの非常食をつまみぐいをしたり、ルークの持ち物の中にペンライトを探し当てて喜び、R2とそのペンライトを引っ張り合う。「わしのだ、わたしのだ(Mine. Mine.)」と決してペンライトを放さないのは、駄々っ子のようなのだ。

『クローンの攻撃』で、ドゥークー伯爵と戦うヨーダ。猛烈なスピードで、ドゥークー伯爵を圧倒する。まさに、「Child hereo」である。

■ 「シャドー(影)」としてのヴェイダー

ルーク・スカイウォーカーの父であるダース・ヴェイダーは、「父」であり、「影(シャドー)」である。「影なる父(shadow father)」である。前述のように、ルークの「父」の善なる部分はオビ=ワンが象徴し、「悪」の部分はヴェイダーが象徴する。

「シャドー」元型は、これまで生きてこられなかった「私」である。人間はもともと、あらゆる性質の可能性を持って生まれくる。しかし、遺伝子的な影響、素質、環境などによって伸びていく性質はごく一部だけに限定されてしまう。それ以外の性質、成長しなかった未発達な性質は無意識の中に押し込められていく。この影の自己が「シャドー」である。

ヴェイダーは力強さ、たくましさ、決断力を備えた存在である。一方、ルークは、タスケン・レイダーの攻撃を受け殺されそうになったり、カンティーナ(酒場)で突き飛ばされたり、ゴミ処理区画でダイアノーガの襲撃を受けて溺れそうになったり、へなちょこで軟弱な存在である。また、レイア姫を助けるために宇宙へ出るという絶好なチャンスが訪れたときも、すぐに決断できない優柔不断な男である。ルークとヴェイダーは非常に対称的に描かれる。それは、ヴェイダーはルークの「影」だから、自分が持ち得ないものを持っていると理解できる。

『帝国の逆襲』のダゴバの洞窟にて、ルークはヴェイダーの幻影と対決する。ルークは、ヴェイダーを打ち負かすが、ヴェイダーの仮面の中にはルーク自身の顔

が浮かび上がり、ルークは動揺する。ヴェイダーがルークの「影」であることを象徴するシーンである。人は夢の中で「影」(の投影するイメージ)と出会ったときに、強い嫌悪感と恐怖感を抱く。ルークがヴェイダーと会った時の強い恐怖と動揺。洞窟に現れたのは、現実のヴェイダーではないことはルークも知っていたはずである。にもかかわらず、ルークが強い「恐怖」を抱いたのは、自分の「影」と出会ったからである。

ルークはヴェイダーとの対決に敗れ、右手を失う。そして、自らの弱さに直面する。ルークとヴェイダーとの対決。それは、ヒーローと悪役との対決ではない。ルークとルークの影、すなわち自分自身との対決と見ることができるのである。

ヴェイダーは、ルークの心の隙間、弱点をつき、ルークをダークサイドへと誘う。ルークは、ヴェイダーとの戦いを通して、自分の弱さに気づかされる。このシーンは対決、決戦というよりも、問答である。禅問答を通して師が弟子にその未熟さを学ばせるのと同様に、ルークの人間的な弱さ、心の迷いなどが、ヴェイダーとの問答によって露呈されてしまう。丸裸にされた自我。それ以上戦闘を続けることはできない。飛び降りて敗走するというルークの行為に納得がいく。

『ジェダイの帰還』における、ヴェイダーのダークサイドからライトサイドへの転身。それは、ルークとの和解であり、「影」との統合を意味する。「統合」という観点から見ると、『帝国の逆襲』のダークサイドへのヴェイダーの誘惑は、統合ではなく逆に「影」に呑み込まれることを意味する。「影」に呑み込まれそうになったからこそ、ルークはヴェイダーの前から敗走するしかなかった。

『ジェダイの帰還』で「影」と統合したルークは、戦士として、人間として大きな成長を遂げ、スター・ウォーズは幕を閉じる。ラストシーンのルークの表情には、今まで彼が持ち合わせていなかった自信と力強さが現れている。

注) 類例 シャドーと『ロード・オブ・ザ・リング』

『ロード・オブ・ザ・リング 王の帰還』(2003 年)で、指輪の魔力によって、フロドは疑い深くなり、サムを信頼できなくなる。魔力の影響を受けたフロドは「影」である。指輪を捨てなければ、という自分に対して、指輪を我が物として私利私欲のために使いたいという「影」なる自分。

フロドはしばしば「影」に呑み込まれそうになりながらも、かろうじて自我を保ち、指輪を捨てることに成功する。「影」を振り払った。あるいは「影」と統合し、しっかりとした自我へと成長したということだろう。

■ 「ペルソナ(仮面)」としてのヴェイダー

ヴェイダーの威圧的な黒いマスク。この黒いマスクに、「ペルソナ」を見ることが出来る。「ペルソナ」とは「仮面」という意味で、人が世界と立ち向かうときにつける仮面を意味し、社会的役割や家庭での役割などによって規定される自己のありようを指す。

『新たなる希望』のヴェイダーは、圧倒的な力と存在感を持つ悪の権化として登場する。しかしヴェイダーは、本当に力強い存在だったのか？ 『帝国の逆襲』『ジェダイの帰還』と見ていくにつれ、本来の自分の心の弱さを隠すために、力強さの仮面を被っていただけではないか、とすら思えてくる。

『帝国の逆襲』で、仮面をとった姿をピエット提督にのぞき見られそうになる。ピエット提督は、見てはいけないものを見そうになったと、表情をこわばらせる。なぜ、ヴェイダーの素顔は見てはいけないのか。ヴェイダーが重傷を負って人工呼吸器のついたマスクをつけていることは、帝国軍将校にとっては周知の事実であったはずだ。

このシーンはヴェイダーの内面的な世界を表象している。すなわち、のぞいてはいけないのは肉体的な意味での、仮面をとったヴェイダーの素顔ではなく、心理的な意味での、仮面をとったヴェイダーの素顔(心)という意味になるだろう。

アナキン・スカイウォーカーは、もともと力強い人間でもないし、威圧的な雰囲気も持っていない。『ファントム・メナス』のアナキン少年は純朴そのもの。母との別れを悲しみ、コルサントに着いてもその動揺を引きずる。『クローンの攻撃』のアナキンは、ジェダイ騎士として、戦士としては強かったが、母親の死に直面し、ひどく動揺する。すなわち、精神的には弱かった。アナキンは決して強い人間ではなかった。むしろ人間的には弱かったから、すなわち自分の本来の力だけでは生きていけないからこそ、ダークサイドの力を借りる道を選択する。

ヴェイダーの素顔には、痛々しい大きな傷があった。すなわち、「心の傷」を象徴するのではないのか？ ヴェイダーのマスクは、心の傷、自分の心の弱さを隠すための「ペルソナ」と考えられる。

『ジェダイの帰還』で仮面をとったヴェイダーの素顔には、迫力も強さもない、単なる気のやさしい父親にすぎなかった。『ジェダイの帰還』公開当時、このアナキンの素顔に失望した人が多かった。「イメージと違う」と。しかし、ここで『グラディエーター』のラッセル・クロウみたいな力強い表情の男が出てきては、映画としての意

味が変わってしまう。むしろ情けないくらいの顔つきをしているからこそ、「ペルソナ」をつけなければ生きてこれなかったアナキンの生き様、アナキンの心の弱さが映像的に表現されるのである。

善から悪に落ちたヴェイダーが、なぜルークの説得によって、簡単に善に戻れたのか。

ルークはヴェイダーにとって唯一の家族であった。レイアの存在をヴェイダーは知らないで、ヴェイダーはそう思っていた。そのたった一人の息子、ただ一人の家族たがらこそ、本当の自分を明かすこと、仮面をつけない本来の自分として接することができるはず。そう考えたからこそ、実際に仮面をとることができた(ダークサイドからライトサイドへと帰還できた)のだろう。

アナキンはずっと、『ファントム・メナス』に描かれていた純真なアナキンだった。それが、自らのアイデンティティを脅かすいくつかの出来事(母親の喪失)、ドゥークーとの対決での敗北、オビ=ワンとの対決での敗北(『シスの復讐』)によって、大きく傷つく。

映画的には、オビ=ワンとの戦いによって、人工呼吸器が必要なほどの重傷を受けたと言うことだが、心理学的にも大きな心の傷を隠す仮面なしでは、自我を保てない状態にあったということになる。

悪の仮面をつけたヴェイダーとして生きていたアナキンは、ルークとの出会い、すなわち家族(愛)を獲得することで、その仮面を取るのである。ようやく本当の自分を露呈できるようになったということ。アナキンの素顔が、やさしい父親の顔であったというのは、心理学的には必然である。

脚注 類例 ペルソナと『スパイダーマン2』

「ペルソナ」。本当の自分ともう一人の自分。本当の自分と社会的な存在としての自分。人間が持つ二面性。その二つの、心の内部の葛藤として映画の格好のテーマとされる。

わかりやすい例としては、『スパイダーマン2』(2004年)がある。悪のために戦う正義のヒーロー、スパイダーマンは「ペルソナ」である。平凡な学生、恋人を思う一人の若者としてのピーター。その、二者が葛藤するわけだ。

ペルソナは、夢の中で制服や名刺として現れる。警察官の制服や、医師の白衣などがそうだ。スパイダーマンのコスチュームも「ペルソナ」を象徴する。ピーター

がコスチュームを捨てるシーンがある。別に捨てなくても、クローゼットにしまっておいてもいいように思うが、心理学的には捨てなくてはいけない。彼の「ペルソナ」と決別することを、明確に表現するためである。実際、彼にとっての仮面(スパイダーマンのコスチューム)を捨てて、彼は生き生きとしてくる。

しかし、恋人のMJがドクオクに連れ去られ、再びスパイダーマンのコスチュームを着る。本来の自分とペルソナとが融合し、精神的な安定を獲得して、映画は幕を閉じる。

■「アニマ」としてのレイア姫

レイア姫はルークの「アニマ」の役割である。アニマとは、ラテン語で「魂」の意味。男性の心にある女性像であり、逆に女性の心の中にある男性像は「アニムス」と呼ばれる。

レイアはルークの性格の女性的部分の人格化と考えられる。『ジェダイの帰還』において、レイアがルークの双子の兄弟であることが明かされる。それは、ルークが自分のアニマを受け入れ、その影響力から逃れたことを意味する。『新たなる希望』では恋愛の対象である女性的存在であったレイアが、『ジェダイの帰還』では別な存在へと変化している。

『ジェダイの帰還』で、レイアがルークの双子の兄弟であるという事実を知った観客のほとんどは、「どうして？」という疑問を抱いただろう。そこには伏線もストーリーの必然性もないように思えるが、ユングの元型的解釈を用いれば、心理学的にはアニマとの統合がなされたという必然の展開として理解できる。

「対立する元型の調和を通して、人は精神的な霊的なめざめ得ようとする、」とユングは言うが、アニマと統合したルークには、人間的に大きな成長が見られている。

ユング研究家の林道義氏は、アニマを母元型との結び付きの強さに応じて六つに類型化した。日本的マリア型、清純・乙女型、姉妹・同志型、妖精型、美魂型、女性秘儀型の6型である。レイアは、この中の「姉妹・同志型」に合致する。「姉妹・同志型」とは、別名シスターアニマ、しっかりアニマとも言われる。男性がグレートマザーから離れて間もない、グレートマザーから完全に独立していない時、まだ十分に育っていない男性性を補償する形で現われる。このアニマはしっかりした意見を述べたり、対等の立場に立って知性的な会話や討論を交わしたり、

客観的・理性的・論理的な助言をする。エロスはない。このアニマに出会った男性は、安心感と信頼感とを得られる。

レイアにはセクシャルなイメージは皆無である。モフ・ターキン提督にも毅然とした態度でのぞみ、決して弁舌で引けをとらない。反乱軍のリーダー的な存在として指導力を発揮する。「姉妹・同志型」マニアにピッタリである。そして実際、レイアはルークのシスターだった。

『新たなる希望』の製作時、ルーカスは 20 世紀フォックス側から、レイア姫の役にセクシーな有名女優を使うように要請されたが、断固としてそれを拒否した。セクシーな女優がレイア姫を演じると、心理学的な意味合いが変わってしまう。レイアがルークの妹であるという事実も、受け入れ難いものになったであろう。

また、レイアは「グレートマザー」元型の養育的な側面を持っている。すなわち、三作品の全てにおいて、ルークを励ましルークにやすらぎを与える存在である。『帝国の逆襲』でヴェイダーに右腕を切られたルークをクラウド・シティから救出するレイア。意気消沈するルークに毛布をかけるレイア。このシーンのレイアのやさしさは、「異性に対するやさしさ」よりも、「母親の優やさしさ」を感じさせる。

「グレートマザー」元型の特徴として、「神秘的な力を用いる」ということが挙げられている。『帝国の逆襲』の最後で、ヴェイダーに腕を切られたルークは、クラウド・シティの底面のアンテナにぶらさがる。「レイア、聞こえてくれ」とレイアに助けを求める。ミレニアム・ファルコンで立ち去ろうとしていたレイアは、ルークの心の声を聞き、戻ってルークを救出する。映画的には、ルークとの双子であり、ヴェイダー(アナキン)の子供であるレイアは、強いフォースを持っている、ということなのだろうが、心理学的に言えば神秘的な力を有する「グレートマザー」元型ということになるだろう。

■■第3部 スター・ウォーズ、その本質への冒険■■

第1章 「父親探し」としてのスター・ウォーズ

第1節 神話における「父親探し」の重要性

「叙事詩のなかではしばしば、英雄が生まれるとき、その父親は死んでいるか、あるいはどこか他の場所にいるので、その英雄は父親探しに出かけなければいけない」(「神話の力」P295)

「素朴な民話においてすら、生娘から生まれた息子がある日その母に向かって、「ぼくのお父さんはだれ」と訊ねると深層がにわかに垣間見られる。この問いは人間の不可視のものとの問題に触れあっている。[父親との]一体化という馴染みの神話モチーフが、必然的にこれにつづく」(「千の仮面を持つ英雄」下、P169-170)

キャンベルは、「父親探し」とそれに続く「父親との一体化」が、神話に頻繁に登場するモチーフの一つであると言う。スター・ウォーズ・トリロジーは、正にルークの「父親探し」の物語と言えるだろう。

■ 父の意思を継ぐルーク

『新たなる希望』で、3POとR2を買ったルークは、レイア姫のオビ=ワン・ケノービに助けを求めるホログラムのメッセージを見る。オーエン叔父に、R2はオビ=ワン・ケノービの持ち物ではないかと尋ねるルーク。オーエン叔父は、オビ=ワンはドロイドを探しに来ない、オビ=ワンはルークの父と同じ頃死んだからと答える。それにすかさず、「(オビ=ワンは)父さんの知り合い？」と尋ねるルーク。ルークは、自分の父について少しでも多くのことを知りたいと思っていた。

次のシーンでは、行方不明となったR2を探しに出かけるが、そこで偶然にオビ=ワンと出会い、オビ=ワンの家に行く。そこでオビ=ワンは、自分とルークの父がともにジェダイ騎士であったことを告げる。そして、ルークの父がダース・ヴェイダーに殺されたという。そして、ルークの父親の形見であるライトセイバーをルークに渡す。

オビ=ワンはルークと一緒にオルデラーンへ行こうと誘うが、それをルークは拒否する。しかし、オーエン叔父たちを帝国軍に殺されて、状況は変わる。

ルークはオビ=ワンに言う。

「一緒にオルデラーンへ連れて行ってください。…フォースの使い方を学びたい。そして、父さんのようにジェダイ騎士になりたい」。

ここでルークが、「<父さんのような>ジェダイ騎士」と言っているのが重要である。実の父をヴェイダーに殺され、育ての親のオーエン叔父も帝国軍に殺された。ルークは自分がジェダイ騎士になること、そしてヴェイダーを倒すことが、父の意志を継ぐことであると自覚したのだろう。

■ 父親を探しあてたルーク

『帝国の逆襲』では、ジェダイ騎士になるためにヨーダの指導を受ける。その動機のひとつは、自分がジェダイ騎士になることで父の意思を継ぎたいと、思ったからだろう。『帝国の逆襲』で、ルークのヴェイダーへの敵対心は明らかなものとなってくるが、それをヨーダにいさめられる。そしてクラウド・シティでは、父の敵ヴェイダーとルークの対決が、現実のものとなる。

しかしヴェイダーは言う。

”I am your father.” 「私はお前の父だ」。

ヴェイダーが、本当の父だと告げられるルーク。自分の父親の敵だと聞かされていた男が、自分の実の父であると…。

精神的動揺を隠せないルークは、ヴェイダーの前から逃亡せざるを得ない。嘘だ、ヴェイダーは嘘をついていると思いたいが、ルークはそれが真実であることを感じたのだろう。

『ジェダイの帰還』では、戦士として、そして人間として成長したルークは、ヴェイダーの前に戻る(帰還する)。この時点では、父親と正面から対峙しようという意志にあふれている。ヴェイダーとルークの対決。ルークはヴェイダーの右腕を切り落とす。セイバーを失ったヴェイダーは抵抗するすべを失うが、ルークはヴェイダーを殺さず、父親と接するようにヴェイダーに接する。

ダークサイドを抜け出すよう説得するのである。

しかし、皇帝の攻撃を受け、ルークは危機に陥る。ヴェイダーはルークを助ける

ために、命がけで皇帝をシャフトへと投げ込む。

この瞬間、ヴェイダーはダークサイドからライトサイドへと帰還した。ヴェイダーは黒い仮面をとり、ルークと対面する。素顔のヴェイダー、すなわちアナキン。仮面をかぶったヴェイダー、すなわちダークサイドに支配しされていたヴェイダーは、本当の意味でルークの父とはいえなかった。息子を救うために自らの命を提供した、すなわち家族への愛を取り戻したアナキンこそが、真の意味でルークの父といえる。この瞬間、ルークは自分の本当の父を見つけたと言えるだろう。

ルークは自分の父親の出自を求めて冒険に出て、本当の父親を探し当て物語は終結する。ルークは自分の父親を求めていた。そして、それを探し出し、父親との和解を果たすことで、父に受け入れられたのである。

スター・ウォーズは、ルークの「父親探し」の物語である。

以下、第2節 スター・ウォーズと「父親殺し」に続く

全 142 ページ中 27 ページ、一割以上をお読みいただきました。

市販されている専門書と変わらないレベルの内容であると、ご理解いただけたと思います。

「おもしろそう」「なるほど」と思われた方は、是非「有料版」をお読みになり、さらに「スター・ウォーズ」への理解を深めていただきたいと思います。

有料版「スター・ウォーズ心理学」は、こちらから↓↓

<http://egoods.holy.jp/sw/book.html>

特典メルマガ サンプル

「有料版」をお買い上げの方は、「スター・ウォーズ エピソード3 完全解説メルマガ」（全8回配信予定、約3ヶ月）に無料登録されます。

こちらのメルマガでは「シスの復讐」の内容に踏み込んだ詳しい解説をお届けします。最終的には、この Ebook と同程度の情報量を配信する予定です。

途中から購読された方も、バックナンバーにて前号閲覧することができます。

以下、既に配信した第3号をサンプルとしてご紹介しますので、充実のメルマガをお楽しみください。



スター・ウォーズ心理学 『シスの復讐』解説編

●第3号● 2005年8月3日発行



【目次】

- 1 はじめに
- 2 アナキンのダークサイド落ちについて考える
 - その3 我執と悟り ～ シスとジェダイ
- 3 読者の解説
- 4 読者からの質問に答えるトライアスロン
- 5 お知らせ

-
- 1 はじめに

この特典メルマガのバックナンバーをアップしました。

こちらのページからご覧ください。

<http://XXXXX.XXXXXXXX>

『シスの復讐』のDVD、アメリカでは11月1日発売に決まりました。

もうすぐです。早いですね。

■2 アナキンのダークサイド落ちについて考える

その3 我執と悟り ～ シスとジェダイ

■ 仏教思想の色濃い『シスの復讐』

最初に、『シスの復讐』を見たときに、たいへん仏教的な話だと思いました。

アナキンは、「パドメへの愛情」のためにダークサイドに落ちて行く。

愛情の深さゆえに…。

一見すると、「愛情」と「ダークサイド」は、相容れないように思いますが、
仏教的に考えると、これは必然なのです。

前号でも書きましたように、最初は「パドメを救うため」に必死になっていたアナキンは、最後には「最強の力を手に入れたい」という、自分の欲望の虜になっているように思います。

つまり、ダークサイドに落ちたのは、自分の欲望を満たしたいがゆえ、
とも思えます。

これに対して、「いや、アナキンはダークサイドに落ちたのは、そんな自我の欲という醜いもののせいではなく、愛情というピュアな感情のためだ」と思う人もいるかもしれませんが、多分それは違うでしょう。

でも、その点に関して、あまり細かい議論をしても無意味なのです。

なぜなら、愛情にとらわれるということも、自分の欲にとらわれることも、
全く同じことですから…仏教的には。

仏教の基本的な考え方を知っていると、アナキンのダークサイド落ちが、
非常によくわかります。

■ アナキンの我執

仏教には「我執(がしゅう)」という考え方があります。

我執とは、自分中心にもものを見るということ。自分に執着するということ

す。そして、「我執」が、全ての煩悩の原因であり、根本とされます。

これを読めばお分かりでしょう。

アナキンは、「我執」そのものです。

<自分>が、マスターになれないなんて。

<自分>は、オビ=ワンよりも強いのに。

<自分>がグリーバス退治の任務に選ばれなかったなんて。

<自分>がシス卿パルパティーンの逮捕に同行させてもらえないなんて。

自分、自分、自分。全てを自分中心に考えています。

「パドメのため」という行動原理も、実は自分のためであることは、既に説明した通りです。

アナキンは、「我執」そのものです。

■ 「煩悩」人間アナキン

「我執」は、煩悩を生みます。

煩悩をいくつか分類する方法があります。

煩悩を「四流」というものに分類したものが、そのその一つ「欲流」というのを見てみましょう。

欲流 欲望が内心の善の性質を洗い流してしまうこと

愛 人間の最も根源的な欲望

恚 怒り憎むこと

慢 他と比較して驕慢(おごり)の心を起こすこと

疑 仏教への躊躇、真理を疑う

纏 内心に潜む悪が外にでて纏わり付くこと

<http://www.kosaiji.org/Buddhism/108bonno.htm>

これをアナキンの行動に照らし合わせると

愛 パドメへの深い愛情

恚 ジェダイ・オーダー、オビ=ワンへの怒りと憎み
慢 オビ=ワンと自分を比較しおごりの心を起こすこと
疑 ジェダイの教えに対して疑いを抱くこと ジェダイ評議会の判断に躊躇、疑いの心を持つこと
纏 内心に潜む悪が外にでてまとわりわり付くこと

完璧なまでに、アナキンの行動は「欲流」に一致します。
つまりアナキンは、「煩惱」バリバリの「煩惱」人間として描かれているということです。

欲流とは、「欲望が内心の善の性質を洗い流してしまうこと」です。
つまり、こうした種々の欲望、煩惱が、善の性質を洗い流してしまう、というのを仏教では警告しています。
内心に潜む悪が外に出て、まとわりつくのです。
まさに、アナキンはその通りになっていきます。

■ 「悟り」の人 ヨーダ

一方、ヨーダは「悟り」の人です。
「悟り」とは、全ての執着から離れた境地を指します。
我執を捨て去った無私の境地です。

アナキンは、ある人の死のビジョンを見たとき、ヨーダに相談します。
しかし、なんとヨーダは、失うことを恐れるなど言います。

ヨーダの言葉を引用します。
「失うことを恐れるのは、ダークサイドにいたる道じゃ」
「執着は貪欲の影ぞ。恐れを手放せ。失うとと恐れていたものを手放さねばならん。恐れを手放せば、喪失に心を乱されることはない」
(ノベライゼーション P227 より引用)

The fear of loss is a path to the dark side. ... Attachment leads to jealousy. The shadow of greed, that is. Train yourself to let go of everything you fear to lose.

「執着は貪欲の影」、このセリフで『シスの復讐』の一連の描写を、仏教思想に基づいて解釈するのが正しいと確信しました。

「三毒の煩惱」という言葉があります。

「3毒」とは、「貪欲(とんよく)」、「瞋恚(しんに)」、「愚痴(ぐち)」の三つをさします。

「貪欲」とは、自分の好むものを貪(むさぼる)る心。

「瞋恚」とは、自分が嫌いなものを怒りの対象にして排除する心。

「愚痴」とは、互いに思いやり、生かし合って共に生きていくという本当の「いのち」のあり方を知らない愚かな心、です。

我執は煩惱の原因で、煩惱の一つが「貪欲」なのです。

「執着は貪欲の影」は、仏教思想そのものです。

ヨーダの「執着」は、原語では「attachment」です。

仏教用語の「我執」を、英語ではどのように言うのか調べてみたところ、「ego-attachment」、あるいは「egoistic attachment」と訳されています。

道元の「正法眼蔵隋聞記」には、次のような一説もあります。

「貪欲なからんと思はゞ、先づ須く吾執を離るべきなり。」

貪欲を正そうと思うなら、まず我執を取り除くべきだ。

さて、ヨーダからアナキンに伝えられた言葉は、

「我」を滅却し、「我」に全くとらわれることのない、「悟り」の境地にいるヨーダならではの言葉です。

しかし、「我」にとらわれ煩惱だらけのアナキンに、その言葉の真意が伝わるはずがありません。

■ 四苦八苦

「四苦八苦」という言葉があります。これは仏教用語です。

これは、「人間のあらゆる苦しみのこと」を言います。

「四苦」とは、人間が避けて通ることができない

生苦(生まれる苦しみ)

老苦(年老いる苦しみ)

病苦(病気になる苦しみ)

死苦(死ぬ苦しみ)

を、さします。

そして、この四つに

愛別離苦(愛する人ともいつかは離れ離れになる)

怨憎会苦(嫌いな人でも会わなければならない)

求不得苦(欲しいものを得ることができない)

五蘊盛苦(自制が利かず心が乱れる)の四つを加えたもの
の四つを加えて、八苦と言います。

ちなみに、四苦は36、八苦は72、合わせて108。

煩惱の数になります。

これらの「苦」の原因は「我執」にあります。

この苦しみの原因を克服すると、苦しみから解放された安らぎの世界(悟り)に至ることができますよ、というのが仏教の教えです。

これと同じことをヨーダは言っていたわけです。

アナキンが苦しんでいたのは、パドメが死ぬという恐怖。

すなわち、「愛別離苦」です。

他にも、「求不得苦」「五蘊盛苦」もアナキンにピッタリ当てはまります。

■ ジェダイとシス

「死」にとられるな。それを受け入れて、乗り越えろ。

言うのは簡単です。

ヨーダの言葉でもあり、仏教が目指す「悟り」の境地がそこにあります。

ヨーダは、「我」を捨てて、それを超えることの大切さ。

「仏教の真理」＝「ジェダイの真理」を説いているわけです。

しかし、それがアナキンには伝わりません。
パドメを救うために行動することが重要だと思っています。

これは、「我執」にとらわれた行動です。
仏教的、すなわちジェダイ的には良くない行動なのです。

ダークサイドは、怒りや憎しみをパワーの源とします。
すなわち、それは「煩悩」と言い換えても良いでしょう。
つまり、ジェダイは「我執」を捨て、「煩悩」を克服することを目的としま
す。
シスは、私利私欲という「煩悩」のままに生き、逆に「煩悩」からエネル
ギーを得ようとしています。

仏教の「我執」と「煩悩」の考え方によって、ジェダイとシスの対比が、非
常に明確なものとなるのです。

■ アナキンがシスの思考回路になった瞬間

ヨーダの瞑想室から出て行くアナキンは、心の中でヨーダに三行半を
たたきつけたでしょう。

「こいつら、話にならん」と思ったでしょう。

アナキンの思考回路には、ジェダイの教えは全く伝わらなかったのです。
ヨーダとの面会后、アナキンは、「パドメを救うために行動しよう」
という気持ちを強めたでしょう。

愛のために。

「パドメのために行動しよう」という行動の源は、「煩悩」のため
ということになります。

「煩悩」に基づく行動。それは、反ジェダイ的であり、シスの行動原理です。
つまりヨーダと別れたアナキンは、完全にシスの思考回路になっているわけ
です。

アナキンのダークサイド落ちが説明されていない。納得できない。
まだ、納得できませんか？

『シスの復讐』の最初から、「我執」バリバリのアナキン。
そして、「恋愛」と「力への欲求」と「自己愛」といった「煩惱」に支配されて、それを行動原理として選択します。

アナキンとヨーダの面会シーンの終わりで、アナキンは「煩惱」に支配されたシスの発想に切り替わるのです。

メイスを殺すだいぶ前に、既にアナキンはシスの住人になっているのです。

『帝国の逆襲』でのヨーダの言葉に仏教思想、特に「禅」の影響が強く現れていることは、スター・ウォーズ心理学でも書きました。

『シスの復讐』では、さらに「我執」と「煩惱」。
それを超えるのか、それに負けるのか。
仏教の中心思想が、引用されていたということです。

結局、「愛のために」でも、「自分のために」でも、仏教的には同じ「煩惱」のためということで、大差はなかったのです。

■3 読者の解説

こちらのコーナーは、読者のみなさんからの解説、感想、意見などを掲載するコーナーです。

皆さんからの、解説、感想、意見をお待ちします。

「解説」というと仰々しいですが、感想でも何でも、他の読者の皆さんが読んで、おもしろいと感じるようなものであれば、どんどん載せていきたいと思っています。

kzion@kabasawa.jp まで、メール件名「心理学解説」で、投稿ください。

冒頭のパル議長救出のシーンですが、この時点ではオビワンとアナキンが最高のパートナーとして描かれていました。

パル議長が捕らわれている椅子に近づくシーンでは二人ともまったく同じ動きで階段を上ります(4~5段ですが)。

これは二人の息がぴったり合っていることを表していると思います。

その後も天井からレイシールドに閉じ込められますが、オビワンがこともあろうにアナキンから "I say . . . patience."

笑えました。実にいいコンビだと感じさせるシーンです。

この頃が二人にとって最高の時期だったのではないのでしょうか。

その後、いろいろあってオビワンがグリーバス将軍を捕らえに出発するシーンで、連れて行ってもらえないアナキンが最後に最大限の譲歩をします。

『自分は傲慢でした』みたいなことを言う場面です。

ありえないほどの歩み寄りをみせたアナキンに対しオビワンは軽くいなして出発してしまいます。

ああ、そこでオビワンが彼の心を酌んで一緒に連れて行っていれば. . . 。

さらにその後、メイスがパル議長逮捕に最初からアナキンを連れいってれば. . . 。

アナキンに対し「信頼する」ことをジェダイ達がしていれば. . . と思いました。

エピソード6で、ルークが信じたからこそアナキンはライトサイドに帰ってくる事ができたと感じます。

私は『信頼』というものがテーマだと感じました。(KMさん)

【樺沢コメント】

オビ=ワンがウタパウ出発前にアナキンと会うシーン。

このシーンは、非常に重要です。

オビ=ワンとアナキンの実質的な別れのシーンです。

この次、オビ=ワンがアナキンと会う時は、アナキンではなくダース・ヴェイダーになっていたわけですから。

このシーンでアナキンは、「自分は傲慢でした」と言います。

そして、自らの心のうちを謙虚に吐露します。

自己中バリバリのアナキンが、初めて心の中をのぞかせた瞬間。
これは、今まで初めてのことだったかもしれません。
つまり、アナキンの「我執」を取り除くチャンスだったかもしれません。

しかしオビ=ワンは、アナキンのアプローチに気付かなかった。
アナキンが謙虚な気持ちになって、オビ=ワンに歩み寄っていたことに。

アナキンのダークサイド落ちを救える最大にして最後のチャンスにオビ=ワンは気付かなかったという……。

一方でこのシーンは、二人の心は通じ合った、という見方をする人もいます。
私も何度も注意していますが、不思議なことにどちらにもとれるのです。

しかし、その後のアナキンは、パドメに朝オビ=ワンが来ただろうと詰め寄るシーンです。つまり、オビ=ワンに対する不信感バリバリ・モードに入っています。

別れのシーンでアナキンが「気持ちを通じた」と感じていれば、ここままで猜疑心だらけにはならなかったように思います。

つまり、アナキンとしては、自分が謙虚になってオビ=ワンに本当の気持ちをさらけ出したというのに、オビ=ワンはその気持ちに気付いてくれなかった。
むしろ、そのことが反動になって、アナキンの極端な行動を推し進めているようにも見えます。

ということで、非常に大切な、アナキンとオビ=ワンの別れのシーン。
みなさんも、注意して見直してください。

■4 読者からの質問に答えるトライアスロン

こちらのコーナーは、読者のみなさんからの質問に、延々と答えていこうと

いうコーナーです。

皆さんからの質問をお待ちします。

ただしも1、2行の質問では何とも答えづらいので、下記の質問のように自分の意見や考えを述べたうえで、質問していただければ幸いです。

kzion@kabasawa.jp まで、メール件名「心理学質問」で、投稿ください。

【質問】

ダークサイドに堕ちたのはパドメの命を救いたかったから、です。

真実はパドメを失って傷つきたくなかった、無力感を感じたくなかったから(母の死の時のように)ですが……。

機械化ヴェイダーになった時、パドメは死んだ、君がパドメを殺したと言われてすぐ信じちゃうのはどうしてなのでしょう？

パドメを救うためにダークサイドに堕ちたはずが結局(堕ちた故に)パドメを死なせたという悲劇なわけですが、パドメが死んだならもうシディアスの従僕にならなくても良かったのではないかと思うのですが。

もちろんパドメへの愛より自己愛が強かったアナキンは「パドメを救うため」は大義名分で実は自分が強くありたかっただけでしょうが、その後、恐怖のダース・ヴェイダーとして殺生や侵略を重ねる心理が今いち分かりません。

アナキンは心優しい子だったとは思いませんが、EP4.5で描かれるような冷酷キャラだったとは思えないのです。ダークサイドに堕ちてパドメを失って心の拠り所になるはずだったジェダイも崩壊したら、身の置き所はシディアスしか居なかったのでしょうか？

アナキンは機械ヴェイダー化してパドメが死んだと聞かされたとき、シディアスに騙されたと瞬間的に気づいたはずですが、シディアスに殺したいほど憎しみは生まれなかったのでしょうか？

機械化されて大きなフォースを失ったアナキンはシディアスに勝てないと分かっていたから従属したのでしょうか？(テラシマさん)

【回答】

> 機械化ベイダーになった時、パドメは死んだ、君がパドメを殺したと言われ

てすぐ信じちゃうのはどうしてなのでしょう

Noooooooooo!!

これは、否認です。

「スター・ウォーズ心理学」にも書きました。

人間は、自分が受け入れ難い事実を告知された時、とりあえずそれを否定するのです。つまり、受け入れてないと思います。あの瞬間には。

ヴェイダーが、パドメの死を真に受け入れたのは、もっと時間が経ってからだと思います。

>パドメを救うためにダークサイドに堕ちたはずが結局(堕ちた故に)パドメを死なせたという悲劇なわけですが、パドメが死んだならもうシディアスの従僕にならなくても良かったのではないかと思うのですが。

私の考えでは、アナキンのダークサイド落ちの最大理由は、「最強の力を手に入れること」であって、「パドメの救済」は第2の理由だと思われます。

もちろん、両方とも達成できればよかったですよ。

また、アナキンの「自分の力への欲求」は、あまり自覚しておらず、「パドメ命」だと思い込んでいたのが厄介です。

したがって、パドメが死んでも「最強の力を手に入れること」が達成されていない以上、シス卿を続けることに矛盾はありません。

>その後、恐怖のダースベーダーとして殺生や侵略を重ねる心理が今いち分かりません。

「スター・ウォーズ心理学」で、ダークサイド落ちについて福島章先生の「非行の心理学」を引用しています。

ダース・ヴェイダーの心理は、犯罪者の心理に近いものがあると思います。

スリ常習者が逮捕され刑務所に服役しました。

出所したのに、またすぐスリに戻るということは、よくあるでしょう。

最初のモラルハザードを越えるのには、大きな障壁を越える必要があります。しかし、2回目からは抵抗なく同じ悪事を働けてしまうわけです。

一度悪の世界に足を踏み入れると、後戻りは大変難しいのです。

結局後戻りできなくするために、パルはアナキンに「ジェダイ寺院の子供殺し」と「ムスタファーの独立星系連合の指導者殺し」という、アナキンのモラルを打ち砕くような任務を与えたわけです。

>身の置き所はシディアスしか居なかったのでしょうか？

>機械化されて大きなフォースを失ったアナキンはシディアスに勝てないと分かっていたから従属したのでしょうか？

結局、大火傷して両手両足を失ったヴェイダーは、最強の力を手に入れる道はなくなりました。したがって、パルに背くこともできず、パルのパシリのように従順な僕となるしかなかったのでしょう。

一方で、パルはヴェイダーが自らの力を超えることを期待していたようですが、そうはならない。すごい将来性のある弟子だと思って弟子入りさせたのに、いきなり大怪我をして使いものにならなくなった。

ヴェイダーに対して失望しながらも、他に有能な奴もいないので、弟子のままにしておいた、という感じでしょう。一種の腐れ縁みたいなものです。

そこに将来有望なルーキーであるルークが現れたわけです。

ヴェイダーとしては、ルークと手を組んで、パルを倒して自由になる絶好のチャンス。

一方で、パルはヴェイダーより有能な弟子を手に入れる、弟子を挿げ替える絶好のチャンスです。

かくして、ルーク獲得の戦いが始まるわけです。

◆—————◆
■ 発行者： 樺沢紫苑
■ 連絡先： kzion@kabasawa.jp
■—————■

以上、特典メルマガのサンプルをお読みいただきました。

このボリュームのメルマガを全八回お読みいただけます。
それで、Eブック「スター・ウォーズ心理学」(146 ページ)と合わせて、
定価 1600 円となっています。

有料版「スター・ウォーズ心理学」は、こちらから↓↓

<http://egoods.holy.jp/sw/book.html>

どうしても無料が良い、という方は

【「スター・ウォーズ シスの復讐」の解説 入門編】(PDF ファイル、15 ページ)
を配布しています。

「シスの復讐」の基本的な疑問を、分りやすく解説した E ブックです。

詳しくは、こちらから↓↓

<http://egoods.holy.jp/sw1/blog/form.html>

※この「プレビュー版」の文字サイズ、体裁などは、「有料版」と全く同じです。

※著作権の関係で、映画の写真は含まれていませんので、ご理解ください。

※当「プレビュー」版の著作権は、樺沢紫苑に属します。

印刷や複製して、友人や第三者に譲渡、販売することを禁止します。

※「こんな無料 Ebook があるよ」と友人に教えたい場合は、無料ダウンロード・サイトのアドレス () を教えてあげてください。

こちらのアドレスは、リンク・フリーです。あなたの、サイト、ブログ、メルマガ等で、このリンクアドレスを紹介するのは、大歓迎です。是非、紹介してください。許可や連絡等は不要です。